

編集後記

2020年の夏にインドで行われる予定であった I-LISS の大会は、2021年10月7～8日にオンラインで行われることになりました。I-LISS Japan からは、大城善盛氏の “Some Lessons Learned from Experiences of School Libraries, Including Librarians, in Japan during the Challenging Times of COVID-19.” と、山田美雪・志保田務・前川和子・大城善盛各氏による “A Study of Public Services of Public Libraries in Japan during the Challenging Times of COVID-19 – Cases of Osaka City Library, Kobe City Library and Kyoto City Library” の2件の発表が予定されています。いずれもコロナ禍における日本の状況を報告したもので、タイムリーな発表になりました。

他学会のことですが、『図書館界』73巻2号掲載の「会員アンケート結果報告」を見ていると、「外国の図書館に関する論文は、あまり必要性を感じない」との自由記述があり、『界』であってもそうなのかと驚きました。もちろん、外国と日本と状況は異なり、そこに書かれていることは明日の仕事には役に経たないかもしれません。ただ、違う状況においてどのような解決が目指されているかから仕事のヒントはたくさん得られるはずです。国際学校図書館協会の大会が東京で行われた際も、SNSには、別世界の話で関係ないといった投稿がありました。これは、期間を通しての参加費が4万円もの大会には非正規としては参加しづらいという理由も含まれていたのですが、外国の話に興味が出ないのは同じです。主催の SLA はずいぶん黒字が出たようですから、結果論になりますが、参加費を下げて、より多くの日本の学校図書館関係者に海外の状況に触れて学んでもらうことができたはずだと悔やまれます。

私たちが今できることとして、文章の形で海外から学ぶ良さを伝えることがあります。今号の研究ノートはいずれも海外から学べるよい教材です。

大城氏の論考からは、学校図書館員とは何なのか、あらためて考えさせられます。「アジアの国々(略)にとっては参考になる部分が多くある」とありますが、韓国には(機能していない部分があるにせよ)何段階かに分かれた“司書教師”の資格制度があり、フィリピンでは、学校図書館員も含めた司書は資格を更新するために研修会などに参加し続ける必要があるなど、日本の近くにも参考にすべき事例はたくさんあるものです。

前川氏の論考は、前々号の公共図書館長のコンピテンシーに続くものです。考察で指摘されているものの他にも考えさせられる点は多く、ポピュラーなものを選ぶというのは日本の言葉で言えば価値論が重視されている気がしますし、「(年齢に)応じたオンラインツールや環境に(略)導く」というのは北米での図書館のフィルタリングの是非の議論が活かされている気がします。

クルトーは学校図書館関係者の中では名前は知られていますが、日本ではちゃんと読まれていないと言ってもいいでしょう。これは、本文で「商標登録もされた」と言及されていることと関連すると思いますが、カナダ・アルバータ州の *Focus on inquiry* がインターネットに公開されているのに対し、無料で気軽に読めないというのが大きいのではないかと考えます。恥ずかしながら、かく言う私も読んでいません。村上氏の論考はこのような状況を踏まえても貴重なものです。

(編集次長 岡田大輔)